



ハルビンの聖ソフィア教会 (解説 p.13)

地理・地図資料

帝国書院

2008年 2月号



ハルビンの聖ソフィア教会

(写真：中国／ハルビン 帝国書院 2007年9月撮影)

写真の正面は、中国のヘイロンチヤン（黒竜江省）の省都ハルビン（哈爾濱）にあるロシア正教の聖ソフィア教会である（ロシア語の読み方ではソフィスカヤ）。正教特有のビザンツ様式の建築で、ドームを中心に聖堂が十字状に配置されている。1907年に駐屯していたロシア兵のために建てられ、その後改築され1932年にこのような姿になった。ハルビンにおけるロシア文化の象徴として新市街の中心にあった聖ニコラス教会は文化大革命の時期に破壊され、今は痕跡もとどめないのに対し、聖ソフィア教会の方は旧市街にあって破壊を免れ、旧来の姿をとどめている。ただし、現在は教会としてではなく、建築美術館として公開され、観光名所のひとつになっている。

ハルビンは現在950万の人口を持つ大都市であるが、もともとはヘイロン川（黒竜江）の支流であるソンホワ川（スンガリ川／松花江）の右岸の畔に開けた交通貿易都市であった。この地点に都市が生まれたきっかけは、19世紀末ロシアが、シベリア鉄道の短絡路として、チタから満州北部を経由してウラジオストクへ通じる鉄道（東清鉄道、完成は1903年）の敷設をはかったことにある。ハルビンはその沿線での最も大きな駅の立地点として開発され、ここからチャンチュン（長春）、シェンヤン（瀋陽）を経てターリエン（大連）、リュイシュン（旅順）へ向かう支線も建設され、これがのちの南満州鉄道になった。

1898年、鉄道建設がはじまるとともにロシア人だけでなく、日本人や欧米人が新しいチャンスを探求めてやって来た。また労働者として多くの中国人も居住するようになり、都市の規模は急速に拡大した。10年後には満州北部で最大の貿易都市となっている。それとともに、西欧資本の企業も立地し、多くの西欧風の建築が建てられ、訪れる西欧人からは「極東のモスクワ」とか「東方のパリ」などと呼ばれた。また世界各国から集まる多様な民族文化を反映して、この教会をはじめとして様々な様式の宗教建築も存在した。ロシア人とともに多数を占めたユダヤ人によるシナゴグ（ユダヤ教の集会所）も見られた。これに対抗するように、中国人居住区の郊外には、仏教寺院極楽寺や満州で最大の孔子廟も建設された。

聖ソフィア教会のある一角は、鉄道の駅とソンホワ川の当初の港の間につくられた道里（ロシア名はプリスタン＝埠頭）と呼ばれた地区で、ハルビンの商業地区として発展した。ハルビンに進出した国際的な貿易関連企業はすべてここに立地した。聖ソフィア教会は、その中心を縦断する兆麟路に沿って建っている。現在でも写真に見るように周辺は大規模な商業施設が立ち並び、歩行者の遊覧地区になっている。ハルビン観光のメインイベントとして有名な氷祭りも、この兆麟路の延長にある兆麟公園が会場になる。

(滋賀大学教育学部長 秋山元秀)